

一般社団法人日本生態学会

No.61

2023年9月

ニュースレター

次々期会長および次期代議員選挙.....1

女子中高生夏の学校 2023 実施報告.....2

記事

I. 第 22 回生態学琵琶湖賞受賞者.....5

II. 書評依頼図書.....5

III. 寄贈図書.....5

書評.....5

京都大学生態学研究センターニュース.....8

一般社団法人日本生態学会

次々期会長および次期代議員選挙

会員各位

一般社団法人日本生態学会選挙管理委員会

定款第6条、第29条ならびに「一般社団法人日本生態学会役員・代議員選任規則」に従って、日本生態学会の次々期会長（理事兼代表理事）候補者と次期代議員の選挙を行います。ぜひ期間内に投票をよろしくお願いいたします。

- (1) 有権者：2023年8月1日の時点で会費を1年間分以上完納した本会の正会員
- (2) 投票期間：2023年10月1日～2023年10月31日
- (3) 投票の方法

※投票はウェブ上での電子投票となります。

- 1. 投票は右記 URL より行います。 <https://iap-jp.org/esj/vote/member/login>
- 2. 画面に表示される手順にしたがって、2023年10月31日までに投票を完了してください。

女子中高生夏の学校 2023 実施報告

高野（竹中）宏平・伊藤海・山口万里花・鈴木智之・高田まゆら・木村恵

女子中高生夏の学校（以下、夏学）は2005年にスタートし、科学技術振興機構（JST）、国立女性教育会館（NVEC）、男女共同参画学協会連絡会などをはじめとする様々な団体、企業、個人の支援のもと、国内最大級の女子中高生の理系進路選択支援事業として、これまで発展してきた。2019年までは、全国的女子中高生を対象に、国立女性教育会館で3泊4日の合宿形式で、サイエンスカフェや実習などを実施してきた。新型コロナウイルス感染症のため、2020年はキャリア相談など一部のみが、2021・2022年には実習なども加えて、オンラインで実施された。日本生態学会は2008年から毎年実習に講師を派遣し、2016年からはポスター展示・キャリア相談にも参加している。



2023年は8月5日（土）～7日（月）の2泊3日で4年ぶりにオンサイトで開催され、全国から98名の生徒と37の学術団体が参加した。5日はキャリア講演、学生企画「あつまれリケジョの森」等、6日は実験・実習「ミニ科学者になろう」、ポスター展示とキャリア相談「研究者・技術者と話そう」等、7日は学生企画「未来予想図を作ろう」発表会等が開催された。夏学2023の冊子はネットでも公開されているので、詳細はこちらをご確認いただきたい。



生態学会からは、キャリア支援専門委員の高野がスタッフとして参加した。また、jeconetの募集を見て応募

した山口がTAとして参加した。また、キャリア支援専門委員会からの依頼により非学会員の伊藤が講師として実習を行った。



6日午前の企画である「ミニ科学者になろう」では、2時間半に渡り15団体が実習を実施した。生態学会の実習タイトルは「骨のかたちからわかる哺乳類の戦略！」で、生徒の希望に応じて、異なる種（シカ、サル、キツネ、イヌ、タヌキ、ネコ、アライグマ）の骨が配られ、バラバラの状態から、ヒントを頼りに並べ直すという内容で行った。生態学に生徒をひきつけるポイントとしては、今回実習で用いた種の骨形態（役割や形状、適応的な意義）とその種の生態との結びつきを中心に随時解説を行うことで、形態と生態との関連性への興味を促した。



7名の生徒（高校1年生が2名、2年生が4名、3年生が1名）が参加した。アンケートによると、夏学前では「とても期待していた」が6名「期待していた」が1名で、夏学後では「とても良かった」が6名「良かった」が1名だった。また以下の感想が寄せられた。「1番楽しみにしていた。対面、しかも少人数で教えて貰えたのが本当によかった」「難しかったけどみんなと相談して似た骨を並べていくのが楽しかった」「標本を触ったことがなかったので普段できない体験が出来て嬉しかった」「実験をしつつ興味のある分野の話が聞けたのがとても良かった」「動物の骨格標本を初めて触って椎骨の作りを理解することができた」「動物の分野よりも植物の分野に興味があったが、違う分野を学んだことで、異なる視点で考えられるようになった」「自分の興味がある生き物の、シカの骨を自分で並べて標本のようにしてみようというなかなかできない体験が出来て、とても楽しかった」。また、夏学の撮影担当者からも「絵になる」と好評だった。



高野は6日午後、キャリア支援専門委員会で作成したポスターの展示を行い、その後のキャリア相談「研究者・技術者と話そう」にも参加した。生物全般、昆虫、SDGs、昆虫食、農作物の品種改良などに興味を持つ生徒がブースに立ち寄ってくれた。生徒の興味に応じて、生態学が学べる学部や学科の紹介、研究室の選び方、卒業後の進路等を紹介した。ポスターでロールモデルとして紹介させていただいた黒江美紗子氏、坂田ゆず氏、石田祐子氏、吉井千晶氏、寺田佐恵子氏にこの場を借りてお礼申し上げる。



その後、引き続き進学 & キャリア相談カフェが開催された。専門分野（物理・化学・数学・生物・医学・歯学・薬学・工学・情報・農学・栄養学）、勉強以外の気になること（文理選択・留学希望・部活と勉強の両立・親や先生との意見の違い・地学地方から都市への進学・会社で働く・苦手科目の勉強方法・夏学OGとフリートーク）のテーマに分かれて、生徒と参加団体のスタッフが交流した。

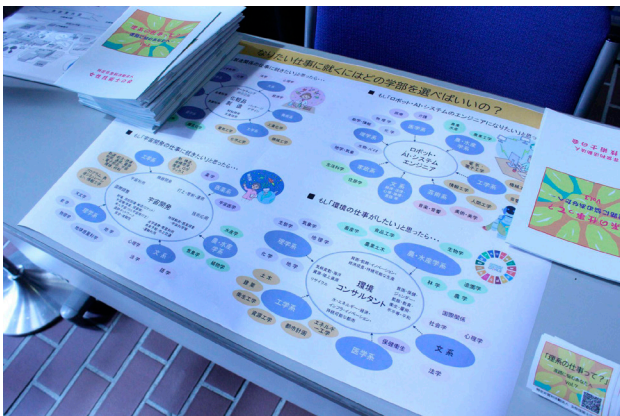


山口は、クイズやトークを楽しむ各種の学生企画イベントにTAとして参加し、アクティビティの運営補助や生徒との交流を行った。多くの生徒は夢や目標を持っており、その実現のためにはどのような進路選択をすれば良いかに興味があるようだった。また、最初は「興味を持っている対象はあるけれどどんな職業があるのかわからない」と明確な将来像がなかった生徒も、夏学のプログラムを通してやりたい仕事や研究してみたい分野を見

つけることができていた。「理系」に含まれる様々な分野で研究者になった方々と、それらの進路を選んでいる少し年上の先輩であるTAという、幅広い年代の人からのリアルな話は生徒たちの悩みの解決に役立ったのではないかと感じる。また、TA 同士で自分たちの研究について話した時間はとても有意義で、普段関わることの少ない学部レベルで離れた分野のおもしろい話を聞くことができた。ぜひ多くの女子大学生・大学院生に参加を勧めたい。



↑生態学会の高校生ポスター用に、このような準備をしても喜ばれるかもしれない。



参考になりそうな、女性技術士の会のポスター

キャリア支援専門委員会では、女子中高生への啓もう活動として今後も参加する予定である。また、若手会員のキャリア形成の一助として、今回の実習のような外部イベントの講師を今後も公募する予定である。今年はjeconetで講師を募ったが残念ながら応募がなかった。興味のある方は教育活動の一環として積極的に応募し、チャンスを活用してほしい。



上のインスタと同様、撮影用の「Certificate of achievement (修了証)」の枠も準備されていた。日本数式処理学会は、そろいのTシャツで参加。

(写真は夏学事務局より提供され、参加者全員から使用許諾を得ています)

記 事

I. 第 22 回生態学琵琶湖賞受賞者

鏡味麻衣子（横浜国立大学大学院環境情報研究院 / 都市科学部）

徐军（中国科学院水生生物研究所淡水生態学研究センター）

II. 書評依頼図書（2023 年 2 月～2023 年 8 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として届けられています。書評の執筆を希望される方はご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@esj.ne.jp）までお知らせ下さい（該当図書は差し上げます）。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. Bryan F. J. Manly, Jorge A. Navarro Alberto 編 深谷肇一訳「生態学のための標本抽出法」（2023）256pp. 共立出版 ISBN:978-4-320-05839-2
2. 菊水健史・永澤美保著「ヒト、イヌと語る コーディーと K の物語」（2023）192pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063956-9
3. 国立研究開発法人水産研究・教育機構編「東日本大震災後の放射性物質と魚」（2023）184pp. 成山堂書店 ISBN:978-4-425-88711-8
4. 植生学会編・前迫ゆり責任編集「愛しの生態系 研究者とまもる『陸の豊かさ』」（2023）240pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-7109-3
5. 水口博也著「世界アシカ・アザラシ観察記」（2023）242pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063957-6
6. 梶光一著「ワイルドライフマネジメント」（2023）272pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062233-2
7. 深澤遊著「枯木ワンダーランド 枯死木がつなぐ虫・菌・動物と森林生態系」（2023）348pp. 築地書館 ISBN:978-4-8067-1653-2
8. 押田龍夫著「台湾動物記 知られざる哺乳類の世界」（2023）164pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063380-2
9. 竹内望・植竹淳・幸島司郎著「雪と氷にすむ生きものたち 雪氷生態学への招待」（2023）194pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-30822-6

III. 寄贈図書

1. 「科学教育振興助成令和 4 年度成果報告書」（2023）424pp. 公益財団法人中谷医工計測技術振興財団
2. 「住友財団 年次報告書 2022」（2023）115pp. 住友財団
3. 「東京大学大気海洋研究所 2023 要覧」（2023）65pp. 東京大学大気海洋研究所
4. 「公益財団法人岩谷直治記念財団機関紙『needs』2023 第 49 号」（2023）119pp. 公益財団法人岩谷直治記念財団
5. 「公益財団法人岩谷直治記念財団 研究報告書 2023 年度 Vol.46」（2023）214pp. 公益財団法人岩谷直治記念財団

書 評

ゲイリー・G・ミッテルバッハ & ブライアン・J・マギル 著、門脇浩明・山道真人・内海俊介 訳（2023）「ミッテルバッハ・マギル群集生態学」丸善出版 400pp. ISBN:978-4-621-30797-7 価格 9,800 円＋税

群集生態学の時代がついにやってくる！？

群集生態学は生態学のなかでダントツに（ダンチに？）面白い分野である（と思っているから評者に選ばれたのかもしれないが）。しかし実際のところ、生態学のなかで一番人気の分野とは言い難い。生態学において一番複雑なパターン・機構を扱い、科学における他分野（複雑系、物性物理、応用数理など）へも魅力的に映る。一方、行動生態学・進化生態学と違って、テレビ映え、あるいは小中学生受けする直感的な面白さに欠ける。「生物多様性」は唯一群集生態学から主流化した概念と言えるが、その「重要性」をアピールすることはできても、やはり直感的な（小学生にわかるような）「面白さ」をアピールすることはなかなか難しい。

したがって、一般学生、あるいは生き物好きの大学生や大学院生をひきつけるのもひと苦労である。進化生態学の専門家をして「何が面白いかわからない」と言わしめるくらいである。だがしかし、群集生態学の秘めるありえないくらいの面白さ、それは本教科書を読めば 200%わかるだろうし、群集生態学に夢になること間違いなしである。そして、一気に 2010 年代終わりまでの最新の知見を、英語論文を一つも読むことなく、本教科書だけでもめたく理解できてしまうのである。

大学生活も後半に差し掛かり、「生き物大好きっ子」から抜け出したい学生さんがいたら、ぜひ本書を手にとってほしい。

分野全体を見渡せる良書

日本語で読める群集生態学関連の教科書が 2000 年代初めまでに何冊か出版されている。そのなかには絶版になっている書籍もある。それらと比較すると、出版年代が新しいことから内容がより最新になっており、より専門的、かつ広範的であると言える。

したがって、本書は、卒業研究を念頭に置き始めた、学部 3 年生以降の学部生や大学院生がメインのターゲットとなる。

また、物理学や数学出身の研究者が群集生態学的（理論）研究を始めるにあたって、群集生態学の現在地を知るために最初に読むべき書籍でもある（適当に選んだ、わかりやすい応用数理的な論文のつまみ食い最初だと、群集生態学者のニーズとはまったく違うベクトルの数理モデルを作ってしまう危険が大きい）。群集生態学の個別の内容に特化したシリーズ本（評者も 1 章分を分担執筆している）もお勧めではあるが、そちらは教科書というよりも研究計画策定時・研究遂行時のガイドブックという感じが強く、分野全体の理解を深く広くするためには本書を強くお勧めする。ただし、嶋田らの『動物生態学新版』（海游舎、2005 年）の第 3 章の内容（個体

の空間的分布)は今後の群集生態学でも重要な古くて新しい内容であるにもかかわらず、本書でもカバーされておらず、併せて読むことを強くお勧めしたい。

訳者の貢献は翻訳にとどまらない

また、2000年代初めまでに書かれた「古典的な」著書・教科書を読んで学び育った若者たちが、やがて日本の群集生態学を牽引する立場となって、本書の翻訳を進めたという点も胸アツ展開である。彼らほど群集生態学を深く愛し理解する人びとはそんなにいないため、本書は単なる訳書以上のものとして、訳者自身の注釈も随所にちりばめられ、読者の理解をなおいっそう推し進めるものとなっている。

古典から最新まで網羅した意欲作

本書の第1部では、「生態学」成立前夜の(あるいはフンボルトが地理学を誕生させる前夜の)19世紀中期以降注目が集まり続ける生物多様性分布の大規模パターン(なぜ、いまだに全容が解明されない??)と20世紀最後の10年以降現在まで続く生態学におけるメインストリームとなった生物多様性と生態系機能のパターンが紹介される。

この二つのパターン=関係(環境と生物多様性の対応関係、生物多様性と生態系機能の対応関係)の完全解明は、群集生態学の(いまのところの)最終目標と言えるかもしれない。この二つのパターンを説明・予測・制御するためのしくみは、還元論的には、種(=複数種の個体群)間での相互作用によって説明できるはずである。第2部はこの「種間相互作用」がいていねいに説明されている。第2部で扱われるトピックは、もっと入門的でページ数の少ない生態学の教科書でも扱われる、ある意味で「基盤的、古典的」内容ではある。しかし、その文脈は21世紀初頭までの最新の研究成果を反映させたものになっており、過去に種間相互作用を学んだ世代の方々もぜひ学び直しに活用していただきたい。第3部から第5部ではわりと新しめの内容(評者が大学院生になる2000年前後の内容:メタ群集・食物網・群集集合など)が扱われており、還元論だけではどうにもならないところまで群集生態学が果敢に挑戦してきたことがわかるだろう。最近では、群集生態学全体を統一できであろう一般法則の整理が進んだり、進化生物学との融合が進んだりしており、こうした最新の話題も第3部以降でいていねいに紹介されている。

この書評の最後に、本書の最終章(Chapter 17:まとめと今後の展望)の冒頭部分で印象に残った部分を引用したい(303ページ)。

十数年前、著名な生態学者である John Lawton (1999, p.178) は、“群集生態学はとっ散らかっており、不確実性が多すぎて、有用な一般法則を見つけるのは困難だ。”と述べた。確かに生物間相互作用には不確実性はつきものである。しかし願わくは本書が、1990年にLawtonが認識した“乱雑さ”から、群集生態学者がどれだけ理解を前進させてきたかを伝えることができたいと思う。

著者(そして訳者)は、十二分に群集生態学の理解の

前進を本書で伝えることに成功したと、私は強く信じるものである。

(龍谷大学先端理工学部、生物多様性科学研究センター 三木健)

小池孝良・塩尻かおり・中村誠宏・鎌田直人 編 (2023)
「木本植物の被食防衛—変動環境下でゆらぐ植食者との関係—」280pp. ISBN:978-4-320-05840-8 価格 3600円+税

本書は、木本植物、つまり樹木における被食防衛に関して多角的にまとめ上げた一冊である。特に、近年の温暖化を含む環境の変動下での植物と昆虫類の関係性について詳しく解説している。樹木の被食防衛については、生態学や植物生態学や樹木生理生態学などの教科書で断片的に取り上げられることはあっても、それ自体を主なテーマとして取り上げ、まとめ上げた本は今までなかったのではないだろうか。また、本書は樹木生理解剖学から群集生態学レベルまでの広範なトピックをカバーしており、コラムも含めて約50名の研究者が執筆に携わっている点も大きな特徴と言える。本書は、以下の全6章で構成されている。

第1章では、光環境や土壌の養水分、オゾンや二酸化炭素といった無機環境の変動と木本植物と植食性昆虫との関係性について概観されている。また、本章の中で木本植物の主要な被食防衛の種類とその作用原理、環境応答の生理的なプロセス、トレード・オフ、間接効果など、植物の環境応答を理解する上での基本概念についても多岐にわたって紹介されており、本書を読み進めるうえで必要な基礎知識を得ることができるようになっている。

第2章では、木本植物の主要な病害虫に対する木本植物の防衛に関する研究の各論がまとめられている。近年、日本の森林に深刻な被害をもたらしているナラガレ病や松枯れ病に加えて、サクラの害虫として現在急速に分布を拡大しているクビアカツヤカミキリなどの重要病害虫の生態について、生活環などの基礎的な情報から最新の研究成果までがまとめられており、これから樹木の病害虫に取り組む若者には必見の章であろう。

第3章では地球規模での変動が指摘されている二酸化炭素濃度やオゾン、気温の上昇、放射線といった物理環境に対する生物の応答について概観している。本章では、植物と植食者との関係性に留まらず、クモなどの捕食者や土壌分解系、生微生物に対する影響など多岐にわたる効果について詳細な実験手法に関する解説と具体的なデータと共に紹介されている。また、オゾンによる植物間の情報伝達の攪乱効果についても気候変動が森林に与える効果を考えるうえで非常に興味深い。本章を通じて、植物を巡る生物間相互作用がどのように物理環境に応答するのかについて概観することができるようになっている。

第4章では、樹木の傷害と虫害に対する応答について紹介している。特に本章では、個体レベルと組織構造レベルとに分けて解説されている。年輪解析から過去の植食者の発生が年輪形成に及ぼす影響や傷害による樹脂道

の形成については、他の教科書などではなかなかお目にかかることができない内容であり、貴重な章となっている。また、これらの応答から過去の植食者の発消長の予測や根接ぎによる樹勢回復技術についても解説されている点も興味深い。

第5章では、樹木を取り巻く様々な生物との関わり合いについての様々な各論が紹介されている。樹洞や立ち枯れ木を利用する生物群、シカによる植生の変化、ドングリとゾウムシとの相互作用、そして樹木を中心とした地上部と地下部の相互作用という壮大な内容で占められている。特に、地上部と地下部の相互作用については、群集遺伝学という近年急速に発展している分野について、ハンノキを対象とした研究例が詳細に説明されている点が興味深い。さらに、コラムでは紹介されている研究で用いられている最先端の技術についても解説されており、今後本分野に取り組む若手にとって有益であろう。また、最後の節では、線虫を食べるきのこの生態についても解説されており、樹木を取り巻く生物間相互作用の多様性と複雑さ、興味深さを感じさせられる。

第6章では、前章までで取り上げてきた様々な現象や研究事例に触れながら、森林や樹木の管理、環境教育、里山保全の取り組みについて様々な事例が紹介されている。章の前半では、植物と昆虫と人々の暮らし、森林の管理、樹木の管理、環境教育、身近な教材としての価値についての概念について簡単にまとめられており、近代日本における森林管理の歴史について簡単に知ることができる。続いて広葉樹林の管理と課題について日本の里山自然である雑木林の管理を例に取り上げて説明されており、最後は滋賀県にある龍谷の森を舞台とした具体的な環境教育活動について具体的に知ることができる。

冒頭でも述べたが、本書は約50名もの著者らによって話題が提供されており、内容も実に多岐にわたっている。そのため、書評の中では取り上げることができなかったが重要かつ興味深い内容が数多く盛り込まれている。これから森林生態学を志す若者をはじめ多くの方々に是非とも手に取っていただきたい1冊である。

(京都大学生態学研究センター 山尾僚)

日本古生物学会 編 (2023)「古生物学の百科事典」754pp. ISBN:978-4-621-30758-8 丸善出版 価格24,000円+税

本書は古生物学にまつわる様々なトピックを網羅的に扱う基本参考書として作成されている。そうした書籍を何故生態学会の書評に？と思われるだろう。しかし、隣接分野だからこそ参考になるトピックが多いというのは学際交流の醍醐味でもある。書評者はこの事典に菌類化石について執筆、参画しているが、全体の構成などには関係しておらず、利害を離れた部分について紹介・評価させていただく。

多くの生物学者にとって、地質学は十分に学べない分野ではないだろうか。自分の扱う材料の生物の系統をイントロダクションで読んで、そこに書かれた地質年代がどのような時代であり、環境であるのか、ピン

とこないことも多い。こうした時に気軽に何度も尋ねることのできる地質学者がそばにいない場合、参考文献付きで気軽に当たれる本書は研究室に一冊ほしい参考文献ではないだろうか。豊富な情報量を広範囲に、品質を保って「日本語で読める」ことは、異分野の成果を誤解なく理解するためには重要だ。特に学生が、こうした文献に当たれる環境を構築することは重要だと考える。本書は地質年代という縦(時間)軸と、各生物群ごとの化石研究史という横軸の両方から読み解くことができる。現代生物学にとり、DNA系統樹からの分岐年代推定は重要だが、結局のところその推定に校正点に入れられるのは化石研究にほかならない。種分化や系統関係を取り扱う研究者に取り、古生物学はリファレンスの必要のある分野であることは自明だろう。さらに、古生態や古環境のトピックも生態学にとって重要な復元がどのような手法と根拠で行われているのかを知っておくことも、正しいディスカッションを構築する上で欠かせない。

もう一点、本書を手にして興味深かったのは、「進化」や「生命史」、「人間との関わり」といった、とすると生態学が自らのフィールドだと考えるような分野への力の入れようだ。しかし、古生物学関係者は進化は自分たちが中心となっているフィールドだと、もちろん思っているし、むしろ現代の生物しか扱っていない生態学がなぜ進化を語れるのか、という疑問を聞かれたりする。もちろん反論があるひとも多いだろうが、個々ではどちらの分野に正当性があるのかという話ではなく、古生物学者の目線で見た進化の教科書、という意味で本書を読み解くのも発見が多いのではないかと、という指摘にとどめておく。さらに、大量絶滅や地球レベルの大変動を研究してきた古生物学者の示す「生命史」という観点も興味深い。そしてその俯瞰的な目線から見た「人新世」に関わる様々なトピック。

生態学研究者の目線と共通するところもあるが、こうした隣接分野の視点を知っておくことは、社会に向かって見解を発信していく上でも重要だろう。「化石の研究法」も含め、生態学関係者が古生物研究者と有益な議論を行っていく上で、そして自らの研究に新たな手法上のヒントを得るためにも、参考になるトピックは多いのではないだろうか。

754ページの大部ではあるが、各トピックは2~4ページ程度にコンパクトに収められ、引用文献付きで紹介されている。リファレンスとしてできれば手元に、少なくとも手近な図書館には置いておきたい一冊であろう。

(大阪市立自然史博物館 佐久間大輔)

Center for Ecological Research NEWS



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野 伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

京都大学生態学研究センターニュースのご紹介

生態学研究センターの活動・イベント、公募共同研究事業の募集案内・報告、運営委員会・協議委員会・共同利用運営委員会の要旨、センター員の研究紹介などを掲載した A4 版（カラー印刷）のニュースレターで、年 2 回（7 月・1 月）発行しています。センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下の URL からご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

～前号（2023 年 7 月号）の主な掲載内容～

- センター長巻頭言
- 2023 年度センターの活動予定
- センター員の紹介
- センターを去るにあたって
- 2023 年度共同研究 a・ワークショップ・研究集会の採択申請決定
- ワークショップ・研究集会 開催予定概要
- 2022 年度共同利用・共同研究事業の活動報告
- 研究ハイライト
- DIWPA だより
- その他のお知らせ

01

魚の健康において鍵となる「コア微生物叢」-ウナギ養殖水槽内の細菌叢動態-

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-03-30-3>

矢島 大意

2022年3月京都大学理学研究科（生態学研究センター）修士修了

02

微生物生態系の崩壊は予測できる-医療・工業・農業における微生物叢制御の基盤情報学-

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-03-30-2>

藤田 博昭

2023年3月京都大学理学研究科（生態学研究センター）博士後期課程修了

03

植物間コミュニケーションの分子メカニズム-受容した香りを防御物質に変える遺伝子の同定-

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-02-28-0>

高林 純示

京都大学・名誉教授

04

生態系の季節的なつながりが生き方の多様性を維持する-森から川に供給される陸生昆虫がサツキマスを育む-

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-03-22-1>

佐藤 拓哉

京都大学生態学研究センター・准教授

上田 るい

京都大学生態学研究センター・研究員

センターニュース メール配信登録のお願い

センターニュース発行のメール配信登録、配信先の変更、配信停止等をご希望の場合は、インターネット上の以下のフォームより必要事項のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>



2024 年度共同利用事業公募のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、2010（平成 22）年度から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として活動してまいりました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や研究集会・ワークショップなどの公募を毎年行っています。2024（令和 6）年度の公募につきましては11月より開始の予定です。詳細はメイリングリストでご連絡いたします。また、センターホームページにも掲載いたしますのでご参照ください。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費 *	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	○	○
賛助会員	年会費 20000 円／22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ・日本生態学会誌 | 正会員のみ有 |
| ・保全生態学研究 | 投稿権利は会員に限定されません |
| ・Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|----------------------|---------|
| ・Ecological Research | 8,000 円 |
| ・日本生態学会誌 | 2,000 円 |
| ・保全生態学研究 | 2,000 円 |

【非会員に向けた学会誌(冊子体)定期購読料】

- | | |
|----------|---------|
| ・日本生態学会誌 | 5,000 円 |
| ・保全生態学研究 | 5,000 円 |

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631